

2019年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	保育士養成研修のインストラクショナル・デザイン －潜在保育士および保育士転職希望者を対象として－
キーワード	①ICTを活用した保育実技研修、②保育者養成音楽教育、③成人学習

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ナガミネ アキコ 長嶺 章子	所属等	植草学園短期大学 福祉学科 助教
プロフィール	私は保育所の音楽講師を勤めたのち、保育士職としても勤務しました。保育と音楽を通じて子どもと関わりたい思いで就いた職でしたが、そこで気になったのは、同僚の保育士たちが皆、保育の音楽に対して強い苦手意識を持っていることでした。子どもにとって音楽とは、特別な技能を習得して行うものではなく、生きることの一部です。歌や手あそび等を通じて保育士や友だちと笑顔で関わり合い、ただ純粹に楽しい気持ちになることが目的です。保育士がその思いに応えるためには、まず保育士自身が音楽を楽しんでほしいと感じました。そこで、現場で子どもと関わる仕事から、保育士を目指す成人の音楽学習支援にシフトし、2017年に現職に就きました。		

1. 研究の概要

- (1) 保育実技（手あそび）の講義動画を作成し、対面授業と組み合わせた研修を実践した。このような研修はすでに存在するが、通常の研修と異なる点は、研修の対象者を、「保育士への転職を希望する社会人」、つまり、これまで保育とは無関係の職業であったが、これから保育士職に転職しようとしている社会人を対象とした点である。また、保育者養成校の学生ではないこうした学習者に対し、養成校として講座を開講することがこの実践のオリジナリティであり、これからの時代に必要性をアピールしていきたい点である。
- (2) 現職保育者は、どのような手あそびをしているのかについてアンケート調査を実施した。また、手あそびをするときに、教育的なねらいを設定しているのかどうかについても調査したところ、「歌」でありながら、音楽として楽しむことより動きや言葉等を楽しむことのほうが主なねらいとなっていることがわかった。音楽教育としての手あそび指導をどのようにしていくべきかということについて実践研究や調査研究を通して検討し、研修内容に反映させていくことが今後の課題である。

2. 研究の動機、目的

(1) 研究の動機

保育士試験では、ピアノ弾き歌いの実技試験はあるものの、実習がないため、受験者は保育実技の学習に困難を感じている。こうした現状を、わたし自身が過去に保育士試験を受験した際に、学習者仲間からの情報で知った。そこで2010年より保育士試験受験者を対象とするピアノ実技課題の講座を開講した。学習者の環境や条件に適した支援を検討して毎年改善を図ることで、2015年に対面講座とeラーニングを組み合わせる（ブレンドする）、通称ブレンド型学習（blended learning）のピアノ実技学習支援システムが完成した。なお、このシステムの効果と課題については、修士論文にまとめた。さらに、この開発をもとに、2018年に本学公開講座において、保育士試験合格者を対象とした保育実技研修を開講したところ、受講者は当該年度の試験合格者のみならず、潜在保育士も含まれた。近年、保育士不足を解消するために、自治体が潜在保育士を対象とした復職支援研修を実施する事例も増えているが、潜在保育士

で直接的な指導を受けたあと、繰り返し復習できる教材と実践の場があることが、学習意欲の向上と継続に必要な要素であるといえる。

(3)手あそび歌は音楽教育においてどのような位置づけと捉えるべきか

C市内勤務の現職保育士約140名にアンケート調査を実施したところ、手あそび歌を保育中に実践する保育者は100%であった。そのねらいについて尋ねたところ、両手指の協応動作を楽しむことや、他児・保育者との交流や、活動の導入、言葉・数・生活知識・歌・リズム・想像力といった、保育内容5領域に関連する要素が挙げられた。回答者は、手あそび歌にも教育的要素を見出していることが読みとれる。しかし、音楽的な楽しみをねらいとする回答に着目してみたところ、「リズムを楽しむ9%」、「歌を楽しむ5%」であった。手あそび歌を音楽として楽しむことは主目的にはなりにくいことが明らかになった。

手あそびは、保育士と子どもたちのかかわり合いの中で生まれ、伝えられる。この自然な伝わりを、音楽の技能習得のひとつとして位置付けるべきなのか否か、すなわち、音程やリズムに気をつけて歌うことを研修や授業で指導することが適切なのかどうかという原点に立ち返ることも含めて、研修内容の改善および実践を続けていく。

4. 研究者としてのこれからの展望

今回の研究を契機として、保育士への転職希望者や、潜在保育士を対象としたeラーニングを活用したブレンド型の研修システムについてさらに改良を重ねていく。そして、その研修の必要性についてアピールし普及に取り組んでいきたい。

同時に、保育士として必要な音楽に関する知識・技能とはどのようなものなのかについて改めて問い直すために、そもそも人間にとって音楽とは何なのかという原点にまで立ち返り、そのうえで、子どもにとって、どのような音楽教育が、なぜ必要なのか等についてもあわせて検討し、研修の内容に反映させ、保育士養成教育に寄与していきたい。

5. 社会に対するメッセージ

本奨励金より助成を受けて実施した公開講座の受講者は、多様な経歴を持っており、今後は保育の現場で貢献しようと熱い思いを持った人たちでした。こうした高い学習意欲を持った人たちを保育の専門家として養成することは、わが国の子ども・保育・教育の未来を明るくすると思います。本奨励金により、講座受講者以外の現職保育士に対してもアンケート調査を実施することができました。調査結果から、子どもと保育士の、音楽を通じたかかわりについての現状を知ることができました。また、回答からは、保育所の忙しい勤務の合間を縫って研修を受け、研鑽を積む、情熱を持った保育士たちが、常により良い保育・教育について試行錯誤を続ける姿が伝わってきました。保育士の人材不足解消が課題となっている現在、このような人材の学習機会と環境を調えることはたいへん重要な課題であると認識しております。保育者養成校の教員として、学外の学習者とも研修を通じて関わりを持ち、包括的な人材育成に寄与する方法について検討し、今後もさまざまな取り組みを続けてまいります。